

# Wilhelm Forster

## 世俗化とバンツのベネディクト会修道院

### 18 世紀のバンツの修道院

1070 年ごろ辺境伯オット・フォン・シュヴァインフルトの女性相続人アルベラダとその夫ヘルマン・フォン・ズルツバッハが彼らの城に設立したバンツのベネディクト会修道院<sup>1</sup>は、18 世紀に文化的小および経済的な観点から見て、いろいろ変遷のあった歴史の中でそれまでなかったような高揚を経験した。偽造された設立に関する古文書のために 1 世紀に亘って続いた修道院の主権を巡るヴェルツブルクとバンベルクの二つの司教区本部の間の争いは 1738 年に結ばれた和解で終了した。バンツはバンベルクの領主支配権を承認し、一方ヴェルツブルクには宗教的な事項にのみ権限が与えられた。修道院はヴェルツブルクに毎年 420 fl. の補助金を支払い、一方バンベルクはその他の税の他に領主としての税金を徴集した。

修道院の所有は全バンツガウに拡がった。バンベルクの領地の 29 の地域に 27 の屋敷、48 の Güter (大農場)、29 の Halbgüter (半農場)、2 つの Viertelgüter (1/4 農場)、95 の Sölden (小屋)、2 つの Halbsölden (半小屋)、24 の Tropfenhäuser (小さな家屋)、2 つの Lasthöfe、26 の Lastsölden、2 つの Jägerhäuser (狩猟用の家)、2 つの Wirthhäuser (旅館)、3 つの漁業権と酒類販売権のある Fahrtgüter および 4 つの水車小屋を持っていた。これらの地の多くでバンツは村および共同体の統治権を持っていた。それらの行政府および下級裁判所はバンツ修道院事務所の傍にあり、そこには官房長官、法律顧問、官房書記および若干の陪席判事がいた。支配権による税は修道院から指名された、しかし領主の「Obereinnahme (ピンハネ)」に対しては支払い義務のある税吏が徴収していた。それに加えて事務員として一人の僧を置いたグロイスドルフ僧院事務所と僧院事務所ブーフ・アム・フォルストがあり、これはザクセン - コブルク、ザクセン - マイニンゲンおよびザクセン - ヒルドブルクハウスの領地の 27 の集落にある修道院の所有物を管理していた<sup>3</sup>。

17 世紀から 18 世紀に変わる直前に活発な、50 年以上も引き延ばされてきていた建築作業が始まった。これは現存の建物をすべて壊し、そこに今日姿を見せているような修道院を建てようというものであった<sup>4</sup>。

輝かしい建築が完成する直前に修道院の僧たちは活発な学問的活動を始めた。これはヴェルツブルクとバンベルクの両方の大学と並んで、バンツをマイン川沿いにおける卓越した精神生活の場所にした。学問の開花は修道院長グレゴリウス・シュトゥム (1731-1768) により始まった。彼は図書室を作り、美術コレクションの基礎を作り、博物標本の展示室設立を提案した。彼の後継者ヴァレリウス・モリトア (1768-1792) は図書室を最新の作品を揃え、貨幣展示室を作った。バンツはやがて学識のある旅行者の目的地となった。彼らの「旅行記」にその印象が綴られている<sup>5</sup>。僧たちに学問的活動の刺激を与えるために、僧が手に入れるものや修道院に属するものについて修道院の原則がすべて破られた。学問的あるいはその他の私的な活動によって得られた収入はその僧が保有でき、自由に使うことができた。大部分の僧はそれを有効に使った。彼らは立派な私的図書室を作ったり、自分が管理を委されている展示室の拡張に使ったりした<sup>6</sup>。A. リントナーに引用されたバンツの僧たちの成果の規模によって活発な彼らの学問的活動を知ることができる<sup>7</sup>。

バンツは定期的な刊行物の出版により学問の世界で大きな名声を得た。この定期刊行物は「ドイツカトリックの学識者による新しい本に対して気兼ねをしない、しかし謙虚な批評を載せる」ことをモットーとしていた<sup>8</sup>。これはカトリックのドイツでは 25 年以上定期的に発行された最初の定期刊行物であった。創始者で推進力になったのは P. プラキドゥス・シュブレングラーであった。彼が編集している限り穏健な啓蒙主義の雑誌が刊行された。この雑誌はこれまでのイエズス会士が代表している学校運営とその学校独占に反対の立場をとっており、カントの批判的な哲学をカトリックの信仰と統一できると信じ、寛容と宗派の再統一を支持していた。また宗教改革に取り組んでおり、穏健なフェブロンニウス主義 (Febronianismus) を信奉し、ヤンセン主義者をその敵対者から守っていた。しかし雑誌の最後の方の巻では急進的

な論調が出るようになった。P. ローマンシャドは非常に才能があり、修道院生活に幻滅し、僧であることに不満足であったが、雑誌に影響を与えた。彼は 1798 年修道院から逃げ出したが、すでにバンツ時代にフィヒテの学説に傾いており、逃げ出したあとイエナとハリコフでプロテスタントに改宗した教授としてシェリングの方向にさらに発展させた<sup>9</sup>。当時バンツでは穏健な啓蒙主義者と急進的な啓蒙主義者が対立していた。これはこの雑誌の終わりを意味した。さらにフランスの革命軍が押し寄せ、またも修道院に宿営したので静かに学問をする時間が無くなった。

バンツの僧たちの文学的成果がこのように輝かしく、時折起こる修道院内部の関係「ヴァレリウス修道院長のかなりな厳格主義」<sup>10</sup> が不愉快だったことが、長年にわたる彼と数人の修道僧との間の争いを招いた原因であろう。査察行為<sup>11</sup> は 1778 年以來修道院長に対する不満と非難の的であり、「彼はその仕事を兄弟たちの同意も助言もなしに行い、特に修道院の物品を注文するときはそうであった」<sup>12</sup>。ヴァレリウスが死んだ（1792 年 5 月 1 日）あと、選挙協約 (Wahlkapitulation) が行われたが、これは修道士集会を真っ二つに割った<sup>13</sup>。修道院長に選ばれたオットー・ロッペルト（1792-1800）は「善良がすべての人にとってすべて」であることを望み、「それ故にこのことが多くの人の機嫌を損ね、やがて不満が小麦の中の雑草のようにはびこった」<sup>14</sup>。もちろん修道院長だけがこの腹立たしいことに責任があった訳ではない。ずっと長く続いている修道院制度への痛烈な批判とフランス革命の思想がバンツの僧たちに影響した。バンツの修道会士 P. ベネディクト・マルティンが匿名で「Mainzer Monatschrift von geistliche Sachen（月刊マインツの宗教問題）」<sup>15</sup> への投稿は当時の修道院制度の状態の深い不愉快さを示している。彼にとって僧の状態は「すべての荘重な最終目的から逸脱した……子供じみた茶番劇とおふざけに満ちたひどい状態」である。今日の僧は、もし自分の境遇に応じた教育を受けようとするならばあらゆる僧としての訓練から解放されなくてはならない。修道院の世俗立ち入り禁止区域は屈辱的な閉じ込めであり、服従が修道院の独裁制により乱用されており、今日の解釈に従えば、貧困が修道院に楽しみは不要であるということにつながっていると見ていた。

P. ローマン・シャドが逃げ出したのちに、齒に衣を着せずにバンツの僧たちに「生活および修道院の歴史」<sup>16</sup> が「邪悪で腐敗した修道士の精神」の結実を示していると書いたことは彼の立場からは理解できるが、しかしそれは節度のない誇張である。シャドの攻撃に対するバンツの修道士たちの返答は、バンツでは「通常の修道士の精神」だけが支配していたのではないことを示している<sup>17</sup>。もちろん世俗化の前の数年間は修道士たちの間に、やがてやってくる解体を嫌がらずに待つ、ある種の修道院疲れがあったことは看過できない。最後の修道院長ガルス・デンナーラインは差し迫った世俗化の前に、修道院が没落する前に救おうと、学校または教員養成のための組織、羊毛および紡績工場または拡張した貧救院に変更することを真面目に試みた。しかし財政的および修道院内部の懸念がこの計画を断念させた。それでもって創立者の意図を歪曲することにならないのか、と彼は自問した。以前の修道会士 J. シャットが言った理由はもっと明らかである。「もしこの改革がバンツについてのみ行われ、バンツの聖職者たちは自分の修道会同志を自由にし、しかし自分自身は修道院に押し込めるのであれば、やがて不満が疫病のように伝わり、解体への望みが激しくなるだろう<sup>18</sup>。恨みを交えず振り返ったシャットは次のように告白している。「身分の低い神々の評議会ですとう修道院の解体が決議された。古めかしい、時代遅れの様式のこのような制度は長く維持できないというのは常に正しい。大きな改革、共同体に有用な志向が求められている」<sup>19</sup>。

## 修道院の世俗化

修道院の解体はまず領主司教区から始まった。1802 年 9 月 6 日、これはまだ 1803 年 2 月 25 日の帝国代表者主要決議でリュネヴィルの和約が最終的に採択される前であるが、プファルツ・バイエルンの選帝侯マックス・ヨーゼフの軍隊がバンベルクを占拠した。11 月 22 日、選帝侯によるフランケン領地の所有が厳粛に公布され<sup>20</sup>、11 月 29 日バンベルクの最後の領

主司教クリストフ・フランツ・フォン・ブゼックがこれまでの臣民を彼への義務から解放した<sup>21</sup>。

その前日に地方総督から委託されたこれまでの領主司教の宮廷および政府参事官ゲオルク・フリードリヒ・メルツがバントの裁判所書記を伴って、「修道院長、修道士、その下の人々に選帝侯への義務を果たさせるために」現れた。現存する教会の銀製品やその他の装飾品のような価値のあるすべてのものが「鍵を掛けて保管された」。金庫と修道院事務所にありすべての穀物およびその他の作物のすべての残高の在庫目録作りが12月11日に役所の判事ブリュクナー・フォン・リヒテンフェルスによって行われた。この時これまで通りの仕事がまだ行われていたので、役人は全部を封印することができなかった<sup>22</sup>。1803年3月19日、修道院は新たに官公吏や従業員を雇うこと、修道士を他の修道院に移すこと、あるいは他の修道院から受け入れることを禁止された。さらに、建築行為、現状の物品および基礎基金を変更すること、また現金および農産物の残高を解消する、または減らすことが禁じられた<sup>25</sup>。

1803年4月19日新しい事態が起こった。地方判事ブリュクナーがその間に設立された選帝侯の特別委員会<sup>24</sup>から修道院の物品、領地、所有地を引き取り、これを暫定的にこれまでの管理支配人のH. ガイガーに引き渡すよう委託された。バントの荘園、および租税義務を負った農民にはこれまで修道院事務所に届けていた納金を今後納めることが禁止された。今はこの納金に対する責任者は管理支配人のH. ガイガーであった。修道院のすべての公印は特別委員会に引き渡された<sup>25</sup>。

1803年5月1日から修道院の聖職者は一定の日当、つまり修道院長は8fl.、中級修道士1fl.15Kr.、普通の修道会士1fl.を得ることになった。この修道院は当時修道士が21人おり、うち助祭が2人であった。修道会士集会はまだ開かれ、「終わりを全うする」ように努めた<sup>26</sup>。もちろん秩序だった修道院生活はもう考えられなかった。それは「どの聖職者も目先のことも分からず、将来を心配している」からであった<sup>27</sup>。夏のうちに修道院の共同体は実際に解体した。修道院の従業員と雇い人の状態は厳しく、特に既に長い間修道院で働いていた者にとって困難であった。彼らの多くは小額の、大抵は短期の年金を貰えたが、修道院が彼らの老後を保証していたのとは比べものにならなかった。以前の修道院長たちから寄贈された多額の養老基金は修道院に忠実公正に仕えた高齢のまた貧しい部下に無料の住居と食事を保証した。養老年金に入れない人は「半分の年金」が与えられた。平均で10年勤めた人に修道院は年に680fl.を支給し、3%の利息で800fl.を貸し出した。利息の収益は老人または生徒や徒弟の育成にお金がかかる両親のために使われた<sup>28</sup>。最後の修道院長ガルス・デンナーラインは再び特別委員会に宛てて彼のかつての修道院の従業員について書いた。彼らは委員会に自分達の窮状を訴えた。ある官房事務員は文書の中で、49年間修道院に勤め、今の年金は250fl.だが修道院との契約では700fl.貰うことになっていたと訴えた<sup>29</sup>。

1803年10月24日の特別委員会に宛てた選帝侯の書状によって修道院の反抗に終止符が打たれた<sup>30</sup>。修道院長と修道士集會に宛てたほとんど同じ内容の文書の中で特別委員会から修道院に選帝侯の決定が伝えられた。それには「バント修道院」が財産事物の配慮においてラングハイム修道院にほぼ伍しており、管理が大変優れており、ずっと以前から各個人の文化的育成を考慮して来ており、立派な根拠のある名声を獲得したことが非常に褒めてあった<sup>31</sup>。修道院長は年金として年に6000fl.とブーフ・アム・フォルスト城に終身の住居とそこにある庭園が約束されたが、そこに作られている醸造所は除かれた。さらに高位聖職者にふさわしい支度金が与えられたが、彼はそれでもって5人の召使いを雇うことができた。通常の修道士の年金は修道院の勤務年数で決められた。30年勤務者は年に600fl.、20年では500fl.、その他は400fl.であった。さらに日常生活に必要な道具、たとえば修道士が私的手段で得たようなもの、も与えられた。支払いにはかつて修道会士がいた地区の選帝侯の税務署が指定された。聖職者が将来その他の聖職者としての年金をもらえないときには、年数に応じて増額した年金を受け取ることができる。

バント修道院の地区には将来2つの地方裁判所と2つの官署(Kammeramt)が作られることになっていたが、その1つずつがかつてのバント修道院に、もう1つずつがかつてのグロイスドルフ修道院が予定されていた。森林の区画をどうするかは選帝侯が保留していた。これまでの修道院教会はクリソストムス・カントールが最初の司教となる、新しく作られた司教

区の司教区教会になった。同時に新しい司教区に関連して、修道院基金と旧バンツの助任司教の生計のためにある 5000fl. の施設基金から、これまで修道院の属していた福祉施設の付与資金が作られた。

1803 年 4 月 19 日以降、特別委員会の委託を受けた、かつての領主司教区の宮廷官房参事ハナウアーと一人の書記からなる競売委員会もバンツで活動を開始した。「この時点から修道院は買い手と売り手が群れをなして押し寄せる雑貨店または新教の神殿のようになった<sup>32</sup>」。6 月 21 日にはもうハナウアーは特別委員会にバンツの流動資産の競売が 7000fl. をもたらすと報告した。10 月 11 日ハナウアーは、「しっかりした監視のもとに良く保存された金属製および木製の食器を 3 日以内に」ミヒェルスベルクの養老院の経理管理人に引き渡すようにという要請を受けた。評価額は 187fl.34Kr. であった<sup>33</sup>。11 月に相当な量の修道院のワインの備蓄が競売に掛けられた。桶は最高値落札人に 18fl.39Kr. で売られた<sup>34</sup>。修道院にある絵画や銅版画と、これは P. ドミニクス・シュラムが 1760 年に作成したカタログには 1133 点あったが、時代の流れで教会に不要とされた真鍮、銅および錫製の品物も競売された<sup>35</sup>。

膨大な博物標本展示室はバンベルクに移され、それにしても非常に放置されていたその展示室に吸収された。1803 年 8 月にバンツでこの展示室の面倒を見ていた P. ディオニス・リンダーが統合されたコレクションの管理責任者に指名された。彼は私財を投じて標本を拡張し、バンベルクの女子高等学校の標本は所有物として委されることになり、それ以降「リンダーの博物コレクション」の名で呼ばれるようになった<sup>36</sup>。非常に価値の高い貨幣コレクションはミュンヘンの選帝侯のコレクションに吸収された<sup>37</sup>。

人間らしい、しかし時代の精神もあらわになった様相を図書室の解体の際の経緯が示している。図書室は修道士がバンツにいるかぎり封印されなかった。さらにハナウアーは「図書室から本を借り出した聖職者は今後も使うことができ、自分の本とみなしてよい」と決めた。そのため P. ドミニクス・シュラムが 1780 年に作った 14500 巻を含むカタログが使えなくなるという結果になった。P. アンブロジウス・ザイフリートが特別委員会の委託を受けて作成したカタログにはたった 8047 巻しか含まれなかった。輸送とバンベルク大聖堂の Nagelkapelle における不注意な保管と取り扱いのため、これらの本の多くが破損したり盗まれたりした。その他の本は価値がないと見なされ、最高値落札者に古紙として売られた。このように 1809 年 10 ツェントナー (1 ツェントナー = 100Kg) と 16 ポンドの古本は 21fl.30Kr. で売り払われた<sup>38</sup>。修道院の農場および大農園について述べるのは難しいし、煩雑でもある。まず修道院が自分で管理していた農場が売却された。賃貸農場ではまず賃貸期間が延長された。しかし修道院は小作料を低く設定して、それに対して現物を要求していたので、将来それに対応する金額を支払うことと決められた。十分の一税についても同様に決められた。これまで修道院に対して行われていた賦役についてもお金を支払させた<sup>39</sup>。その後の何年かのうちに賃貸農場も最高値落札者に売却された。確かにこれでもってこれまでの借用権所有者は大なり小なり土地を持つようになったが、競売には他所の土地からの者も参加した。こうしてバンベルクのユダヤ人ザムエル・ヘスラインは 6 つの農場 (旧バンツに 3 つ、ドライスドルフに 1 つ、クラインヘルトに 2 つ) を 53474fl. で競り落とした。金額の半分 (26737fl.) は 8 日以内に支払う必要があり、残りは分割払いであった<sup>40</sup>。

1807 年 3 月 23 日バンツの財政担当の役所は国王の地方管理事務所に、賃貸期間が終了したすべての土地をそこの地方判事による評価と十分な公告ののち、「一般の競売に掛ける」と報告した。入札はほとんどの土地では評価額を半分以上上回ったが、森に囲まれた牧場だけは評価額に到達しなかった<sup>41</sup>。

そうこうするうちに、修道院の大きな中庭に囲まれた入り口の門の左側にある翼部が全部売られ、シュテッテンで校舎を建てるために運ばれた<sup>42</sup>。"Haec facies Trojae, cum caperetur, erat" と最後の修道院長 J. シャットは自伝に、かつては誇り高かった修道院の運命を陥落したトロヤに比して、憂鬱そうに書いている。

おそらくフランケンで獲得した新しい地域を旧バイエルンと統治する国王家に結びつける意図で、バイエルンの公爵ヴィルヘルムは修道院を買い、彼の夏の住居に改装した。同時にかつての修道院の周辺の支配地および裁判管轄区域も取得したが、これには旧バンツ、クライ

ンヘルト、ケステン、ネーデンフォルフ、シュテッテン、ヴァインガルテン、ドライスドルフの村落が含まれていた<sup>43</sup>。

かつてのこの修道院の修道士がバイエルンの公爵による取得にどのように反応したかは興味深い。シャットは公爵が「我が愛するバンツ」を時代の嵐から救った騎士であるとし、1114年バンツを全面的な荒廃から救った聖オットー（1102年からバンベルクの司教）になぞらえた。この最後の修道院長は、「今はバンツのさすらい人は”hic Troja fuit”とすることは許されない。太古の遺跡にいる昼間は見えないフクロウのようにではなく、侯爵と侯爵夫人はバンツに住まいを選んだのだ」と公爵に感謝した<sup>44</sup>。

その他の高位聖職者の修道院に対するのと同じようにバンツに対しても世俗化は一世紀続いた発展の終わりを意味した。18世紀に一度建築および文学に関して力強い発展があったが、しかしこれは修道会の伝統的なイメージの多くに疑問を投げかけ、動揺させた。世俗化に対する厳しい批判のあと冷静な客観的な態度が続いた。「教会の品物の略奪という大きな不正な行為」は有益な結果ももたらした。修道会も教会も一般に振り返ってみて、損失はまた獲得でもあり得ることを経験した。「バイエルンの教会と修道院を襲った嵐」はバンツにおいても貴重な教会の財産を毀損し、投げ売りした。バイエルン国は世俗化した聖職者に多額の年金を支払うことになったが、領土を拡張し、まとめることができた。フランケンで特に多かった領土の分散が取り除かれた。世俗化によって現在のバイエルン国の発展が始まった。

## 参考文献

- 1 H. Hirsch, Die echten und unechten Stiftungsurkunden der Abtei Banz (Sitzungsber. d. Akad. d. Wiss. in Wien, Phil. u. hist. Kl., Bd. 189), Wien 1919. Die Urkunden sind hg. v. P. Österreicher, Geschichte der Herrschaft Banz, Bd. 2. Bamberg 1833. Der 1. Band ist nicht erschienen. Vgl. auch: v. Guttenberg, Territorienbildung, 130ff. und S. Hess, Das Kloster Banz in seinen Beziehungen zu den beiden Hochstiften Bamberg und Würzburg unter Abt Johannes Bruckhard, München 1935, 81-87.
- 2 s. Anm. 1.
- 3 J. B. Roppelt, Historisch-topographische Beschreibung de ... Hochstiftes Bamberg, Nürnberg 1801, 183-217, HAB Franken, R. 1, H. 7, 40ff.
- 4 J. Holtz, Zur Baugeschichte des Klosters Banz (BHVB 103) 1967, 447-484. Dazu: Bayerische Kunstdenkmale (Bayer. Landesamt für Denkmalpflege Abteilung Inventarisierung der Kunstdenkmäler), Bd. XXVIII, Landkr. Staffelstein, München, 1968, 27-81, 321-324.
- 5 R. Herd, Banzer Reisebeschreibungen aus dem 18. Jh. (Gesch. am Obermain 6) 1970, 13-29; vgl. auch Stud. u. Mitt. z. Gesch. d. Benediktinerordens u. seiner Zweige, hg. v. d. Bayer. Benediktinerakad. München (= StMBO) 36, 1915, 407f.
- 6 Ein Beispiel dafür findet sich in der “Verteidigungsschrift des Banzer Benediktiners und Bamberger Universitätsprofessors J. B. Roppelt”, die von W. Heß herausgegeben wurde (StMBO 36) 1915, 425-481. Diese Verteidigungsschrift gibt uns allerdings auch Einblick in die unerquicklichen innerklösterlichen Verhältnisse in Banz vor der Säkularisation.
- 7 A. Lindner, Die Schriftsteller und die um Wissenschaft und Kunst verdienten Mitglieder des Benediktinerordens II, Regensburg 1880, 203-227.